

『よるのびょういん』



谷川俊太郎 作

長野重一 写真

福音館書店 1979年

どうしてもこれを紹介したい！

今回は“写真絵本”の名作を紹介します。残念なことにこの本は現在品切れ中。園には古いものが2冊あります。次々に素敵な絵本が現れているとは聞いていますが、残念なことに私はこの本以上に緊張感を楽しめる作品にまだ出会っていません。だからどうしてもこれを紹介したくなりました。

いきなりこう始まります。

あさから おなかが いたいと いていた ゆたか、よるになって たかいねつがでた。

ゆたかくんは虫垂炎のため緊急搬送されます。緊急手術を受け無事朝を迎えるまでの、この一晚の病院での出来事をモノクロ写真がリアルに伝えます。写真と文字のモノクロの構成と、淡々とした文章が作り上げる緊張感が、子ども版プロジェクトXといった感じです。

誰かの想像力が生み出したストーリーではありません。この本は日常をただ切り取っただけの内容です。だから「そのこのころはどうなっているの？」ともっと深く知りたいと思うし、緊急事態に遭遇した大人の対応にも興味を持つのです。病院に駆け付けたお父さんとお母さんのやり取りが、なんともとぼけたものになってしまうのも、作り物ではない面白さです。

「これはこわい本だよ」きりん組の男の子が言います。そうなのよ。確かに白黒写真が怖いよね。内容もホッとするとか、なごむとか、感動するとかではないけれど、こういう絵本の楽しみがあるのです。

私がこの本を好きな理由はもう一つ。この冷静でテンポ良い文章を音読してみてください。落ち着いて、決して泣き声を使わずに、もちろんつかえたりせずに声に出して読んでください。何度か読んでいるうちに読む者も、聴く子どもも文章を覚えてしまうかもしれません。絵本がしみこむみたいです。

この本が書かれた1979年も、コロナで大変な今も、たくさんの方がそれぞれの持ち場で懸命に働いています。ずっと神様が見守って下さっています。

2021年1月26日 梅崎啓子